
時の時計台

クルクルココロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の時計台

【コード】

N0486V

【作者名】

クルクルココロ

【あらすじ】

街の時計台では願いが叶うとされていた。少年はそのことを信じていた。

（前書き）

是非縦書きで読んでみてください。

??ゴーン、ゴーン??

夜十二時。街中に鐘の音が響き渡る。一件の古びた建物から一人の少年が飛び出した。彼の腕の中には小さな箱が抱え込まれており、箱の中からは甲高い金属音が聞こえてくる。彼は脇目もふらず通りを走っていく。彼が走っている間、街中にまるで怪獣のうなり声のような鐘の音が響いていた。

街灯がかすかに照らす薄暗い公園で、すでにシヨウタとユウスケが待っていた。

「おせーよ、何してたんだ」

「ごめん」

「ちゃんと持ってきたのか」

「もちろん。この箱の中に入ってる」

そう言って少年は左脇に抱えていた箱を右手で指差した。

「なあ、やっぱり止めないか」

ユウスケが小さな声で呟いた。

「今更何言ってるんだよ」

シヨウタがそう言っているとユウスケは視線を落とした。

「シヨウタは怖くないの？」

「そりゃ、少しは怖いさ。でも、この前充分に話し合っただろ」

「そうだけど・・・」

「大丈夫だって。うまくいくさ」

シヨウタはユウスケの背中を軽く叩いた。

「分かったよ。行くよ」

ユウスケはまだ渋っている様子だったが、顔を上げて箱を抱えている少年を見つめた。

「せっかく持ってきてくれたんだもんな」

ユウスケは両手を強く握りしめ、右足を一步踏み出した。
「早く行こう。鐘が鳴りやまないうちに」

三人は時計台の前に辿り着いた。未だに時計台の鐘の音は鳴り続けている。シヨウウタが少年に箱を開けるように指示を出した。少年が箱を開けると中から大小様々な工具が出てきた。シヨウウタはその中でも手頃な大きさの金づちを選ぶと塀を乗り越えて、時計台の敷地内へ入った。ユウスケもシヨウウタに続いて塀をよじ登る。少年は工具箱を閉め、その上へ乗り、右手を塀の上に乗せた。

敷地内はいやに広々としていて、地面には名前も分からない雑草たちが至る所に生えていた。シヨウウタは少年とユウスケよりも一足先に時計台の裏側に回り込んだみたいで、広場にはもういなかった。

???パリーン???

窓ガラスの割れる音が辺りに響き渡った。少年とユウスケはその音の大きさが予想をはるかに上回るものであったため、思わず立ち止まって二人で顔を見合わせた。ことの重大さに気づいた二人は再び大急ぎで時計台の裏を目指して走り出した。

少年が時計台の裏に着いたとき、シヨウウタはもうすでに時計台の中に侵入していた。少年は割れた窓ガラスを見上げた。ユウスケが少し遅れてやってきた。

「ユウスケ、肩車して。僕が中に入ったら、ユウスケを抱き上げるから」

少年がそう言うとユウスケは頷き、窓の前でしゃがみ込んだ。少年はユウスケの肩にまたがり、手でぽんと軽くユウスケの頭を叩いた。ユウスケは力強く地面を押しつけ立ち上がった。少年のすぐ目の前に窓枠が現れた。割れたガラスで手を切らないように気をつけながら少年は時計台の中へ入った。

??ゴーン、ゴーン………???

時計台の鐘の音が止んだ。少年は時計台の中へ無事入ると、次に窓から上半身を乗り出してユウスケの手を掴み、彼を持ち上げた。侵入に成功した二人はシヨウタを探した。ところがシヨウタの姿が見あたらない。窓から入るかすかな月明かり以外に時計台の中を照らすものはない。

「シヨウタ！」

ユウスケが叫んだ。しばらく返事を待ったが何の反応もない。少年が上へと昇るはしごを見つけた。シヨウタは上に行ったのだと思っただけ二人ははしごを昇り始めた。

??ガチャガチャガチャ??

時計台の正面扉の方から乱暴に鍵を開けようとする音が聞こえてきた。二人ははしごを降り終え、階下を見つめた。

??ボタンツ??

扉が開き、一筋の光が時計台の中に差し込んだ。時計台の番人が来たのだ。二人は大慌てで目の前にあるらせん階段を駆け上った。

僕はその日、公園に母親と一緒に遊びに来ていた。僕は公園内にある遊具の中でも特に砂場が大好きだった。砂場を遊具と呼んでいいのかどうかは分からないが、とにかく僕は砂をいじるのが大好きだった。小さなシャベルで砂を掘り返しては、また埋め直し、そしてもう一度掘り返す。そんなことを飽きずに繰り返していた。

僕が砂場で遊んでいると、少し太った体型の男の子が砂場にやってきた。その子も母親と一緒に公園に遊びに来ていた。僕の母親とその子の母親はどうやら知り合いのようで、母親二人で話し込み始めた。僕は自分の遊び場が汚されないように、やってきた男の子に背を向けて砂をほじくり出した。男の子は僕のことには気にもとめず、僕の後ろで砂遊びを始めた。

日が暮れ始めた頃、僕の母親が僕のところにやってきた。家に帰るときがやってきたのだ。僕はしぶしぶ立ち上がった。ふと後ろを見るとそこには大きくて立派な砂の山が出来上がっていた。僕は思わずその山に見入ってしまった。しかし、それを作った男の子はすでにそこにはいなかった。

「ツトム、あいつのこと知ってるか」

「いや、知らない」

「あいつ、確か去年この学校に転校してきたんだろ」

僕とシヨウタが学校にある鳥小屋の中を掃除していると男の子がやってきた。

「遅れてごめん」

「おせーよ、田中。もうほとんど掃除終わっちゃったし」

「エサやりは？」

「まだだよ」

「じゃあ僕がエサをやっとくよ」

田中はそう言うつと倉庫にエサを取りに行つた。僕とシヨウタは入り口付近に集めた鳥の糞や虫の死骸をちりとりで掃き取ると小屋の外へ出た。

「なんであんなやつと一緒に班なんだ」

シヨウタはそう言いながらゴミ袋の中にちりとりのゴミを入れた。僕とシヨウタは田中と同じ鳥小屋管理のグループであった。今日から一週間、僕たちは放課後に鳥小屋を掃除したり、エサをやったりしなければならぬ。

「なあ、ツトム。もう帰っちゃおうぜ。遅れてきたのはあいつだし」
僕はエサやりがとても面倒くさいことを知っていたので少々気が引けたのだが、実際、田中は掃除をしていないわけだし、僕ら二人は帰ってもいいような気がした。シヨウタは箒とちりとりを鳥小屋の横にかけるとランドセルを担いで校門へと歩き出した。僕も掃除用具を片付けてシヨウタの後を追った。

「おれ、最初会ったとき、ユウスケのことあんまり好きじゃなかったんだぜ」

シヨウタはそう言いながらジョッキに半分ぐらい入っているビールを一口飲んだ。

「そうだったの？なんとなくそんな気はしてたけどさ」

ユウスケは串焼きを食べながら笑った。

「今は嫌いじゃないぜ、ははは」

シヨウタも笑った。僕はそんな二人のやり取りを見ていると、不意に自分の幼かった頃のことを思い出した気がした。

「なんで仲良くなったんだっけ」

「なんでだろう。ツトム覚えてる？」

僕は考え事をしていたので、ユウスケの急な質問に少し戸惑ってしまった。

「えーっと、鳥小屋掃除かなんかで一緒になったんじゃないかな」

「あー！そうだそうだ！思い出したよ！」

シヨウタが目を大きく見開いて、机を平手で叩いた。

「えー、そうだったっけ」

「そうだよ！ユウスケ、最初の当番の日に遅れてきたんだ。おれ覚えてるから！」

シヨウタは大声でユウスケに反論した。そして、ジョッキに残っていたビールを一息に飲み干した。

「ツトム、生中もう一杯注文してくれ」

僕は後ろを振り返って店員を呼んだ。

「ユウスケは願い事とかあるか？」

シヨウタはブランコをこぎながら尋ねた。

「願い事？」

「願い事」

ユウスケはブランコをこぎながら少し考え込んでいるようだった。

「お花屋さんかな」

「何だそれ！お前女かよ！」

シヨウタはそう言って笑い出した。あまりに面白かったのかブランコから落ちそうになっていた。

「うるさい」

ユウスケは不機嫌そうな表情を浮かべた。その顔を見たシヨウタはさらに大きな笑い声をあげた。

「ツトムは？」

僕はどきりとした。僕はブランコをこぎながら考えた。僕の願い事。何だ。僕がなりたいたいこと。僕がしたいこと。

「そっだよ。ツトムの願い事は何なの？」

「えーっと」

「一体僕は何を求めているのだろう。」

「僕の、僕の願い事は……」

「あのときは本当にバカだったよな。本気であの場所に行けば願い

事が叶うって信じてたからな」

シヨウタはビールを二、三口飲んだ。

「そうだね。一体誰が言い出したんだっけ」

「んっ？あれ。誰だったっけ」

二人は過去の記憶を思い返しているようだった。

「僕だよ」

僕は一言そう言った。

「いいか、作戦はこうだ。時計台では夜の十二時に鐘が鳴るだろ。

そのときがチャンスだ。あの鐘は街中に響き渡る。俺たちが裏の窓ガラスを割っても絶対にバレない」

「どうやって窓を割るんだよ」

「金づちさ。金づちを投げつけてやるんだ。窓ガラスを割る音は鐘の音で打ち消される。割れた窓ガラスから中に入るんだ」

「本当に大丈夫なのかな」

「大丈夫に決まってるさ。なあツトム」

僕は砂場で砂をいじくりながら小さく頷いた。

「僕の家屋根裏に工具箱がある。それを持って行くよ」

「決まりだ」

「いつやるの？」

「明後日。それまでに願い事を考えておくんだ」

ユウスケはしぶしぶその作戦を認めたようだった。

「ユウスケはあそこで何をお願いしたんだ」

「僕？」

ユウスケは腕を組んで考え始めた。シヨウタは相変わらずビールを飲んでいる。

「お花屋さんだったかな」

ユウスケがそう言うとシヨウタはビールを吹き出した。

「どこの小学生男児がそんなことをお願いするんだよ！」

僕も思わず笑ってしまった。

「なんだよ。いいじゃないか別に。じゃあシヨウタは何をお願いしたのさ」

「俺か？俺はもちろんサッカー選手だ」

シヨウタはそう言っ胸を張った。

「シヨウタ、サッカー選手が夢だったの？」

「そっだよ。知らなかったのか」

「いや、初めて知った」

「えっ」

「ごめんごめん、冗談だよ、冗談。もちろん知ってたさ」

二人は一緒に笑い出した。酔いがいい具合に回っている。僕はそんな和やかな光景を見ながらウイスキーを一口飲んだ。

「いよいよ明日だな。ちゃんと願ひ事は考えたか」

「もちろん。ツトムは？」

「いや、まだ考え中」

「明日だぜ」

シヨウタはランドセルを地面に置きながら僕にそう言った。僕は少し焦っていた。家にいるとき、学校にいるとき、ベッドの中にいるとき、勉強しているとき、鳥小屋を掃除しているときなど、ありとあらゆる時間を使って考えていたのだが、全く思いつかない。

「作戦は二人とも覚えたか。特に重要なのはツトムだぞ。お前が工具箱を持ってこなくちゃ意味がない」

「分かってる」

シヨウタはブランコに腰掛け、地面をけり、勢いよくブランコをこぎ始めた。

「明日、俺の願ひが叶うのか」

シヨウタの顔には笑みがこぼれているように見えた。

「まさかな。ツトムがあんなことを願うなんて思ってもみなかったぜ」

「そうだね、僕も驚いたよ」

シヨウタとユウスケは赤い顔で僕の方を見た。

「とっさに思いついたんだよ」

僕はウイスキーをもう一口飲んだ。

「ツトムって本当に欲が無いんだな。それで楽しいのか」

「楽しかったから願ったんだよ」

そう言っ僕は天井を見上げた。僕は一体何を願ったのだったろうか。その願い事は叶ったのだろうか。そんなことを考えていると、あの当時の記憶が眼前によみがえってくる気がした。

僕はらせん階段をユウスケと一緒に駆け上がった。下では時計台の番人が怒鳴る声が聞こえる。もう後戻りはできない。

階段を上り終わると広間に出た。石造りの広間であった。窓が一つだけあり、そこから月灯りが差し込んでいた。そして、窓の前にはシヨウタが立っていた。

「シヨウタ！番人が来た！」

ユウスケは大声で叫んだ。

「分かってる。だから早く願い事を言うんだ。ここがその場所だ。俺はもう言っただぜ」

ユウスケは急いで窓の方へ駆け寄った。

「お花屋さんになれますように！」

ユウスケはそう叫ぶと、番人が怖いのか、その場にしゃがみ込んで泣き出してしまった。シヨウタはその姿を見て笑い出した。

「次はお前の番だぜ、ツトム」

僕は白い光の差し込む窓に近づいた。空には満月が出ていた。眼下を見下ろすと、光り輝く四角い箱がたくさん見えた。それは、どこまでも続いているようであった。おそらく、この箱のいずれかに僕の家族は住んでいて、そして、そこにはいつもの日常があるのだろう。シヨウタの家もあるし、ユウスケの家もある。知らない人の家もある。でも、それらはみんな明るくて温かくて綺麗な光を放っている。そう、この箱の中にはあの空に輝く満月が入っているんだ。「おい、早くしないと番人が来ちまうぜ」

僕はシヨウタの言葉で我に返った。そうだ。願い事だ。僕の願い事。シヨウタの願い事でもなく、ユウスケの願い事でもなく、僕だけの願い事。それは、それは、

「この時間、この、みんなという、止まらない時間を、いつまでも、いつまでも、忘れませんように！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0486v/>

時の時計台

2011年7月20日13時59分発行